

4 - (2) 教育課程・教育内容

1. 現状の説明

(1) 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

〈1〉大学全体

【科目区分体系】

教育課程の編成・実施方針に示されているとおり、本学の学部学科のカリキュラムは次の科目区分により体系的にかつ分かりやすく編成されている。

(専門分野)

基礎教育科目区分	又は	導入科目区分等
入門・概論科目区分	又は	基礎科目区分等
応用・各論科目区分	又は	基幹科目区分等
卒業論文	又は	卒業研究等

(全学共通分野)

共通学芸科目区分
キリスト教・同志社関係科目区分
外国語科目区分
スポーツ・健康科目区分

【科目の体系性および順次性】

個々の科目は、それぞれの科目区分の中に、年次および学期を決めて設置されている。履修要項には、学部学科ごとにすべての専門科目がそれぞれの科目区分と学年学期に配当された『科目配置表』が掲載されているため、自学科学生はもとより他学部他学科の学生が履修する場合でも、個々の科目の位置づけと難易度の概要を一目で把握できるようになっている。

また、個々の科目の末尾のⅠ、Ⅱ、Ⅲなどのローマ数字は、それぞれ難易度（グレード）の違いを示し、A、B、Cなどの英字は、同一難易度での内容の違いを表している。

このように、科目区分、年次・学期配当、科目名による難易度表示により、本学の科目の体系性および履修上の順次性は明確になっている。

【他学科科目履修】

「他学科科目」に関しては、学生に多様な分野の授業科目の履修機会を提供するために、全学で552科目が他学部学科の学生に対してオープンになっている。これらの「他学科科目」の履修で修得した単位は自学科の共通学芸科目区分の単位として卒業に必要な単位に算入される。他キャンパスの科目の履修も可能となっている。

【他大学との単位互換】

他大学との単位互換制度には、同志社大学との単位互換、大学コンソーシアム京都加盟大学間の単位互換、金城学院大学との夏期集中科目の単位互換、奈良県立医科大学との単

位互換、放送大学との単位互換の各制度がある。それぞれの制度で本学の学生の履修が可能となっている科目数は同志社大学科目429科目、大学コンソーシアム京都加盟大学科目540科目、金城学院大学科目9科目、奈良県立医科大学科目1科目、放送大学科目249科目となっている(4(2)-1、2、3、4)。

【国内協定大学との学生交流】

フェリス女学院大学、日本女子大学、金城学院大学とは個別に学生交流協定を締結して、年間2名程度の学生を1年間または1学期間相互に派遣している。学生は休学する必要がなく、学費もそれぞれ自大学に納入するだけでよい。学生は、派遣先の大学で任意の1学科に所属し、当該学科の科目を中心として他学部他学科の科目をも柔軟に履修することができるようになっている。派遣先の大学で修得した単位は、本学卒業の単位として認定することが可能である。学生は異なった環境の中で貴重な経験を積むことができる(4(2)-5)。

〈2〉学芸学部

学芸学部の授業科目は、各学科が教育課程の編成・実施方針をもとに順次的、体系的に編成し、履修要項の中にカリキュラム概念図として示して各区分の履修要件、卒業要件とともに学生に周知している。各学科とも、各年次にふさわしい必修科目、選択科目を配置し、体系的な科目履修を求めると同時に、それぞれの科目区分ごとに卒業に要する単位数を指定している(4(2)-6 p. 45～47、p. 50～51、p. 54～55、p. 58～59、p. 62～63、p. 66～67、p. 121～123、p. 131～132)。

(音楽学科)

音楽学科には、演奏専攻と音楽文化専攻の二つの専攻がある。演奏専攻は、全ての分野にわたって専門の実技を教授するための『第一実技』という科目があり、この科目は4年間の積み上げ必修科目である。演奏専攻には声楽・鍵盤楽器・管弦打楽器の三つのコースがあり、かつ鍵盤楽器コースには、ピアノ・オルガン・チェンバロの三つの楽器、管弦打楽器コースはヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス・ハープ・フルート・オーボエ・クラリネット・ファゴット・サクソフォーン・ホルン・トランペット・トロンボーン・ユーフォニアム・チューバ・打楽器の16の楽器がある。おのおの『第一実技』という専門科目をマンツーマンのレッスン形式で行う。それに加えて、演奏能力をより豊かにするために「基礎教育科目」により演奏するうえで必要となる音楽の理論を身につけることや、「入門・概論科目」により音楽の歴史や地域性などを学ぶこと、また、「応用・各論科目」によってレベルの高い演奏法や理論を学ぶことができる体系的なカリキュラムを構築している。音楽文化専攻は、西洋音楽の基礎の上にミュージックスタディーズ・ミュージックエデュケーション・ミュージックセラピー・サウンドデザインの4つの科目群を設定し、幅広い学びと専門性を深める体系的な学習が可能になるよう、自由度の高いカリキュラムと、演習、実技実習科目を設けている。

(情報メディア学科)

情報メディア学科は、提供する科目の多様性を一つの特徴としていることから、比較的选择科目を多く提供し、一方で、共通的に学習すべき基礎科目については必修科目としている。卒業必要単位124単位のうち、必修科目は48単位、選択必修科目は8単位、選

択科目は68単位である。必修科目は、「キリスト教関係科目」4単位、「外国語科目」8単位、「基礎教育科目」から4単位、「入門・概論科目」から4単位、「メディアデザイン科目」「メディアコミュニケーション科目」「メディアテクノロジー科目」「メディアプロデュース科目」から各4単位、計16単位が必須である。また、2年次から始まり「卒業演習・制作」まで続く「ゼミナール科目」の計10単位も必修科目に含まれる。必修科目の学年ごとの配分は、1年次30単位、2年次10単位、3年次4単位、4年次4単位となっている。多くの必修科目は基礎科目に設定してあるため、1年次で必修として基礎知識をまず身につけてもらうようにしている。3年次、4年次については、「演習科目」(ゼミ)だけが必修科目であるが、これらは卒業研究および卒業制作に向けて継続的に実施することが重要である。高学年になると自分の専門性が決まってくることから、選択科目から自分に必要な科目を選択的に履修する機会を多くもたせている。登録単位数の上限は、各学期(セメスター)ごとに1・2年次は24単位、3・4年次は28単位である。

なお、基礎知識習得科目および専門性の高い「演習科目」(ゼミ)が必修であり、他の部分で学習選択の自由度を高めるという教育課程の編成方針は、当初の目標に合致している。学生の専門性の特化に伴い多様な選択科目が履修できることで、学生はそれぞれの目標に沿って、一貫した科目の選択が可能となる(4(2)-6 p.122~128、4(2)-7)。

(国際教養学科)

国際教養学科では、英語圏の大学への1年間の留学を必須としており、これを軸として学習・研究が有効に進められるように科目を設置している。

1年次から2年次春学期は、留学に求められる英語力および学習・研究に必要な基礎的な知識と能力を培う期間として位置づけられる。基礎教育科目では、留学前に受験が必須となるTOEFLのスコアを向上させることを最大の目標としており、アカデミックな英語運用能力を徹底的に鍛えることに主眼を置いている。国際教養科目では、留学先となる英語圏(イギリス、北米)および自国である日本の社会、文化、歴史について学ぶ科目、および留学準備のための科目が必修で設置され、これらの授業は英語によって行われる。演習科目では、「国際教養演習」を必修とし、論理的思考、批判的読解、ディスカッションなど、大学生に求められるスタディー・スキルの基礎を養成した後、学術的研究への導入を行う。

2年次秋学期から3年次春学期は、留学のための期間として想定している。国際教養学科の留学では、学生は留学先大学が定める条件を満たした段階で正規科目を受講することを前提としており、取得した単位は本学の単位として認定される。留学中も、学生は本学科の科目として「Tutorial/実地研究指導」を履修し、メールやオンライン会議システムを利用して本学科教員から指導を受け、個人研究を進める。

3年次秋学期から4年次は、留学期間中に学んだ事柄を基礎として、4年間の学びの集大成としての研究を行う期間である。1年半にわたる必修の「Senior Seminar/卒業研究」は、学生による個人研究およびそれに基づく卒業論文の執筆に関する指導を軸として進められる。これに加えて、基礎教育科目と国際教養科目では、上級の内容の科目が提供され、留学から帰国後も、英語運用能力を伸ばすとともに英語による授業を受講して学ぶことを可能としている。

〈3〉現代社会学部

(社会システム学科)

社会システム学科では、法律、情報処理、英語運用の力を基礎学力として重視しており、2年次以降の「国際理解」「京都学・観光学」「ライフマネジメント」「ビジネスマネジメント」「法システム」からなる5つのコースの多様な開設科目を自由に履修できる仕組みとなっている。3年次以降のゼミナール科目では、専門的領域を更に深めるとともに実践的な課題に取り組む課程となっている。なお、コースは、決して閉ざされた体系ではなく、他コースの開設科目も自由に選択できる仕組みになっている。

上記のような構成の下、基礎教育では、「基礎教育科目」として1年次に全員必修の『基礎演習』という科目を設置し、調査法、プレゼンテーション、ディスカッション、レポート・論文作成など、基本的かつ必要不可欠なスキルに関する教育を行っている。

「入門・概論科目」では、社会システム学科で学ぶために必要となる基礎的知識を習得すべく、1年次に19科目の概論科目を5つのカテゴリーに分けて設置し、最低3つのカテゴリーより10単位以上の修得を義務付けている。また、「基礎教育科目」「入門・概論科目」に加え、「法律系科目」「コミュニケーション系科目」「情報科目」からなるコース共通の3系列の科目群と、5コースで構成されるコース科目群からなる「応用・各論科目」を設置し、柔軟かつ系統的なカリキュラムを組めるようにしている。

「法律系科目」では、法律系科目を重点的に履修することにより、司法試験を初めとして各種資格取得や、国家・地方公務員などの採用試験に対応できるように配慮している。「コミュニケーション系科目」では、特にネイティブスピーカー教員による指導によってハイレベルな英語運用能力の習得を目的とした、英語特別プログラム「CASE (Career and Academic Studies in English)」を開設している。なお、CASEは、上級クラス2クラス、中級クラス4クラスを開講し、英語適性検査により選抜を行っている。また中国語、フランス語、ドイツ語でも、「CASE」と同様な「ラピート」プログラムを用意している。「情報科目」では、少人数の実習形式で学習する『コンピュータ活用』『情報活用実習Ⅰ～Ⅴ』を設置している(4(2)-8 p. 43～52)。

なお、卒業に必要な修得単位数は、総計124単位以上である。また、4年次の必修科目である『卒業研究』では、それまでの学習の集大成として卒業論文などの作成に取り組み、その成果を所属ゼミや卒業研究発表会で公開している。この他、本学科では、中学校・高等学校教諭、博物館学芸員、図書館司書、上級情報処理士などの免許資格取得のための科目を履修することができる。

(現代こども学科)

現代こども学科では、1年次の必修科目は『基礎演習Ⅰ』(2単位)『現代こども学概論』(2単位)『教育とこどもの社会史』(2単位)『こどもの発達心理学』(2単位)『教職論』(2単位)『教育課程総論』(2単位)『フィールドワーク入門』(2単位)『聖書A』(2単位)『聖書B』(2単位)『英語講読ⅠA』(2単位)『英語コミュニケーションⅠA』(2単位)『英語講読ⅠB』(2単位)『英語コミュニケーションⅠB』(2単位)『こども学演習』(2単位)である。

2年次に『教育課程論』(2単位)『児童理解と指導』(2単位)『教育方法と技術』(2単位)『教育の原理』(2単位)『発達と学習の心理学』(2単位)『学校教育論』(2単位)、1年から連続して、「こども学」についての専門的な学習を行ううえで基礎となる学習を行う

ことを目的としている。

3年次に『道徳教育論』(2単位)『特別活動論』(2単位)『教育カウンセリング』(2単位)『幼児理解』(2単位)『応用演習Ⅰ』『応用演習Ⅱ』、4年次に『卒業研究Ⅰ』『卒業研究Ⅱ』となっている。全体として必修科目を精選し、教員養成・保育士養成科目との関係性を考慮し、かつ多様な学生のニーズに応えられるような科目の設定を行っている(4(2)-8 p. 69～77)。

＜4＞薬学部

臨床能力・研究能力・医療倫理感を備えた薬剤師、医薬品開発研究者の養成を目指して、6年間の教育課程を体系的に編成している。本学の教育理念であるキリスト教主義、リベラル・アーツ、国際主義に基づき、初年次から倫理観の醸成(キリスト教主義教育の活用)、医療人としての教養の醸成(リベラル・アーツ教育の活用)、英語教育(国際主義教育の活用)を行う。更に、1年次秋学期からは、講義系科目と実験実習科目から構成される薬学部専門科目を適切に組み合わせることにより、高度な専門能力と研究能力を身につけることができるように科目を配置している(4(2)-9 p. 43～50)。

即ち、薬学専門教育における講義科目を1年次から6年次にかけて重層的に配置して知識を習得させる一方で、実習実験科目で持っている知識を応用する能力や技能・思考力を養成できるように6年間の教育体系が構築されている。これらの科目は相互に有機的に関連付けて配置されている。特に、基礎科目と臨床科目の連携は年次の進行とともに明確になるようにカリキュラムが構成されている。さらに、患者団体や東洋医学関連の医師・漢方専門薬剤師、看護師、管理栄養士などの学外関係者との交流を通して医療従事者である薬剤師としての視野を広げている。

＜5＞表象文化学部

表象文化学部では、各学科とも基礎教育科目群、入門・概論科目群、応用・各論科目群、ゼミナール科目群を配置し、4年間の集大成である卒業論文の作成にいたるまでに必要な学習が適切に行なえるよう、カリキュラムを体系的に編成している。また、表象文化学部の多彩な教育内容を最大限に活用して個性豊かな学生を育成するために、副専攻制度を導入し、他学科科目の計画的な履修を可能にしている。各学科のカリキュラム編成については以下のとおりである。

(英語英文学科)

英語英文学科の教育目標は、高度な英語運用能力(英語4技能)の育成と、4つの分野(文学・文化・言語・コミュニケーション)におけるコンテンツの学習である。4技能を習得した上で専門教育へと進む(4(2)-10 p. 43～50)。

1. スキル科目

「話す、聴く、読む、書く」の英語の4技能の徹底した訓練を、1年次から4年次まで、少人数クラスで実践する。TOEICを1年次生から3年次生までの全学生が受験し、学年平均点が600点以上になるという到達目標を明示化し、モチベーションを高める。さらに2年次から始まるAESコース(Accelerated English Studies)では4技能の熟達のみではなく、英語によるコンテンツ学習を含む。

2. 専門科目

2年次の「Introductory Seminar」では、プレゼンテーション、ディスカッション、レポート作成など、アカデミック・スキルの基本を導入する。3年次の「Junior Seminar」と4年次の「Senior Seminar」では、文学・文化・言語・コミュニケーションの各分野から、各自の興味に応じてゼミを選択し、学生が意欲的に研究を進め、4年次には卒業研究の中間発表として、7月にポスターセッション、1月には卒業研究発表会を行い、4年間の学びの集大成としての卒業研究を完成させる。

3. 特色ある選択科目

William Shakespeare の英語劇を原語で学生が上演する「Shakespeare Production」は63年の伝統ある科目である。また幅広い教養を養うために、応用各論科目では、ネイティブ・スピーカー教員によるレクチャー科目を多数開講している。さらに表象文化学部に対応しい科目として、日本語日本文学科との共通科目として、「文学と表象」、「文化と表象」や、京都研究科目群の「英語で読む京都印象記」などを開講して、英語だけではなく幅広い分野を学べるようにしている。

(日本語日本文学科)

日本語日本文学科の授業科目は教育課程の編成・実施方針に則って体系的に編成し、『表象文化学部履修要項・シラバス』(4(2)-10 p. 54~55)に、各分野の履修要件、卒業要件とともに記載して学生に周知している。卒業に必要な修得単位数は124単位であり、全学共通の科目区分と日本語日本文学科の学問領域の科目区分に分けられる。そのうち学科科目のカリキュラムは学部共通科目、導入科目(必修2単位)、基礎科目(必修4単位)、基幹科目(選択必修4単位)、ゼミナール科目(必修12単位)の5科目群に区分されている。1年次から4年次に向けて、基礎・導入的な科目から順次履修できるようカリキュラムを配置すると同時に、それぞれの科目区分ごとに卒業必要最低単位を設けている。

学部共通科目では「文学と表象」「文化と表象」といった学部の名称ともなっている「表象」とは何かについて学び、導入科目では、学科の4分野である近代文学、古典、現代日本語、日本語教育の入門科目を配し、2年次から本格的に始まる基幹科目への導入としている(4(2)-10 p. 53~60)。

さらに、上記の学びは、全学的に開講されている共通学芸科目の学びにより補完され、2年次以降の「ゼミナール科目(基礎演習、演習、卒業研究)」へ発展する。少人数による演習形式の学びを通し、総合的かつ専門的な教養育成している。さらに、机上の学習を通し修得した知識を具体的実践へと導く技術を備えた「人間」の育成を目指し、社会に即した学びの機会をも積極的に提供している。

<6>生活科学部

生活科学部では、それぞれの学科の教育課程の編成・実施方針に基づき、以下に記述するように授業科目を開設し、教育課程を編成している。

(人間生活学科)

人間生活学科の授業科目は教育課程の編成・実施方針に則って体系的に編成し、『生活科学部履修要項・シラバス』(4(2)-11 p. 44~50)の中に、各分野の履修要件、卒業要件とともに記載して学生に周知している。卒業に必要な修得単位数は124単位であり、全学共

通の科目区分と人間生活学科の学問領域の科目区分に分けられる。そのうち学科科目のカリキュラムは基礎教育科目（必修2単位）、入門・概論科目（必修16単位）、応用・各論科目（必修4単位）、ゼミナール科目（必修12単位）の4科目群に区分されている。1年次から4年次に向けて、基礎・導入的な科目から順次履修できるようカリキュラムを配置すると同時に、それぞれの科目区分ごとに卒業必要最低単位を設けている。

入門・概論科目では、衣生活学、食生活学、住生活学を始め、従来の家政学の成果を踏まえ、「ひと」、「くらし」、「環境」という3系統に組立てられた科目群の学びを通し、多様化した人間の生活の本質を探究している。「ひと」の学びにおいては、家族・親子・子どもを始めとする多様化した「ひと」の課題を、「ひと」自身、「ひと」のこころ、「ひと」の関係性に注目しつつ探究している。「くらし」の学びにおいては、「衣・食・住」と呼ばれてきた「暮らし」に欠く事のできない領域の学びに加え、「くらし」を横断的に探究している。「環境」の学びにおいては、生活環境、居住環境、社会環境、さらには、地球環境へと視野を広げた学びを実践している。

さらに、上記の学びは、全学的に開講されている共通学芸科目の学びにより補完され、3年次以降の「ゼミナール科目（応用演習、卒業論文）」へ発展する。少人数による演習形式の学びを通し、総合的かつ専門的な叡智育成している。さらに、机上の学習を通し修得した知識を具体的実践へと導く技術を備えた「人間」の育成を目指し、実験や実習に即した学びの機会をも積極的に提供している（4(2)-11 p. 43～50）。

（食物栄養科学科）

食物栄養科学科の授業科目は、各専攻の教育課程の編成・実施方針に則って体系的に編成し、『生活科学部履修要項・シラバス』（4(2)-11 p. 54～60、p. 64～70）の中に、各科目区分の履修要件、卒業要件とともに記載して学生に周知している。

食物科学専攻の卒業に必要な修得単位数は124単位であり、全学共通の科目区分と専門的な科目区分に分けられる。そのうち専門科目のカリキュラムは基礎教育科目、入門・概論科目、応用・各論科目、卒業論文の4つの科目区分で構成する必修科目および選択必修科目A～C群、選択科目で編成している。1年次から4年次まで基礎・導入的な科目から順次履修できるようカリキュラムを配置すると同時に、それぞれの科目区分ごとに卒業必要最低単位を設けている（4(2)-11 p. 54～55）。食物科学専攻に特化したカリキュラムとしては、2年次に京都の地の利を生かした「京の食材論」、老舗料亭や京菓子司の主人による実演を交えた演習科目である「京の料理と菓子」、3年次に食品関連企業で実習する「インターンシップⅡ」を配置している（4(2)-11 p. 54）。また、講義で学んだ知識を実践するための実験・実習を1年次から3年次まで連続的に配置している。4年間の集大成としての卒業論文を必修とし、履修するための必要要件を定め、3年次終了時にその到達度を確認する（4(2)-11 p. 60）。

管理栄養士専攻の卒業に必要な修得単位数は138単位であり、全学共通の科目区分と専門的な科目区分に分けられる。そのうち専門科目のカリキュラムは基礎教育科目、入門・概論科目、応用・各論科目、卒業論文の4つの科目区分で構成する必修科目および選択科目で編成している。1年次から4年次まで基礎・導入的な科目から順次履修できるようカリキュラムを配置すると同時に、それぞれの科目区分ごとに卒業必要最低単位を設けている。また、講義で学んだ知識を実践するための実験・実習を1年次から3年次まで連続的に配

置している(4(2)-11 p. 64~65)。3年次の2月から3月にかけて行われる病院での臨地・校外実習を履修するための必要要件を定め(4(2)-11 p. 67)、一定程度の知識を習得した者のみが病院実習に出かけるよう質保証する。本専攻では、学生全員が病院、福祉施設、保健所において臨地・校外実習を行うよう設定することで、幅広い体験の中から将来の管理栄養士像を描けるよう配慮している。卒業論文は選択科目であるが、履修するための必要要件を定め、3年次終了時にその到達度を確認する(4(2)-11 p. 70)。4年次秋学期に設置する「卒業演習」(4(2)-11 p. 229~230)は必修科目であり、1ヶ月に1度実施する管理栄養士国家試験模擬試験と連動させることで4年間の学びの総まとめを行う。

＜7＞文学研究科

文学研究科においては、博士課程(前期)では、各専攻ともA類科目、B類科目の分類のもと修士論文の作成に必要な学修が適切に行えるよう、カリキュラムを編成している。博士課程(後期)では、各専攻とも特別研究を設置し、指導教員との親密な指導体制を通じて、博士論文の作成に必要な学修が適切に行なえるよう配慮している。各専攻のカリキュラム編成は以下のとおりである。

(英語英文学専攻)

博士課程(前期)

英語英文学専攻博士課程(前期)では、英米文学分野、英語学・言語学分野の基幹科目をA類(選択必修)科目として設置している。A類はイギリス文学、アメリカ文学、英語コミュニケーション・英語教育の3つの科目群からなり、合計16の科目を提供している。B類科目は選択科目である。イギリス文学・文化、アメリカ文学・文化、ヨーロッパ文学・文化、英語学・英語教育、英語運用スキルの5つの科目群からなり、合計29の科目を提供している。専門分野の研究の深化、英語運用能力の向上だけでなく、本学が標榜するリベラル・アーツ教育の精神にも合致するよう、また大学院生の研究対象が伝統的な学問領域を越えて広がりつつある現状にも柔軟に対処しうよう、嘱託講師の力も借りて多彩な少人数科目を設置し、内容の充実に努めている。課程修了にはA類・B類あわせて30単位以上(ただしA類科目は10単位以上)の修得が必要である(4(2)-12 p. 50)。

博士課程(後期)

英語英文学専攻博士課程(後期)では、英文学と英語学・言語学両分野に研究指導科目「特別研究」を設置し、学会発表や学術雑誌への論文投稿等を目標にして、自立した研究者に求められる能力を育成する。また博士論文執筆に向けたきめ細やかな指導を個別に行っている(4(2)-12 p. 52)。

(日本語日本文化専攻)

博士課程(前期)

日本語日本文化専攻 博士課程(前期)は、A類科目およびB類科目によってカリキュラムを編成している。A類科目群は、日本文学・日本文化コース、日本語・日本語教育コース、音楽文化コースよりなりいずれかのコースから最低12単位以上、A類科目群としては20単位以上履修する事としている。B類科目群からは12単位以上、うち8単位までは他専攻のB類科目群より履修する事を認めている(4(2)-12 p. 53)。

博士課程(後期)

日本語日本文化専攻博士課程（後期）では、博士課程（前期）の分野に係る研究指導科目として「特別研究」を設置しており、2科目8単位以上を修得し、「論文指導」を受けることとしている。指導教授の指示により、博士課程（前期）の科目を修得することができる（4(2)-12 p. 54）。

（情報文化専攻）

修士課程

情報文化専攻では、情報文化専攻に関して、より専門的に学ぶために、授業は A 類（20 科目）と B 類の科目（14 科目）とに分けられ、A 類科目にはメディア文化分野（10 科目）、表現文化（10 科目）の 2 コースが設置されている。A 類科目を担当する教員 10 名はすべて学芸学部情報メディア学科の授業を担当している専任教員である。論文指導もまた A 類科目を担当する教員によって行われ、学生指導上有効に働いている。B 類科目も基本的には A 類の教員が担当しており、A 類科目に設置できなかった学問分野についてはその分野に秀でた実績のある教員を厳選して配置している（4(2)-12 p. 56）。

〈8〉国際社会システム研究科

本研究科では「国際協力と国際組織」（国際組織の活動を中心とした国際協力）「国際交流と社会」（文化・経済・環境政策面での国際交流）「現代社会と文化」（各国・各地域の文化的多様性と社会の調和）「現代社会とこども」（教育的な面からの現代社会とこどもの関わり）という 4 分野を設定し、それぞれ A 類科目（選択必修）ならびに B 類科目（選択）を設けている。A 類科目は修士論文指導教員が担当し、修士論文を作成するにあたっての基礎的理論並びに調査研究方法を修得させる。また B 類科目は当該分野における高度な教育・研究の業績を有する教員（含む嘱託教員）が専門的見地から教育を行っている（4(2)-12 p. 57）。

〈9〉薬学研究科

本研究科の教育課程は医療薬学専攻であるから、あくまでも『臨床』を意識するとともに、研究領域としては基礎薬学から臨床薬学まで幅広くカバーする必要がある。具体的には、論文指導教員の専門分野に従って A 群（基礎薬学領域）、B 群（医療薬学領域）、C 群（実践的臨床薬学領域）の 3 分野をおいているが、その相互関係は比較的密である（4(2)-13）。

A 群（基礎薬学領域）では有機合成技術、構造活性相関論、生体高分子構造解析とその制御、生体及び病原微生物の分子レベルでの理解という、薬学の最も基本的な部分の知識と技術の修得を目的として講義科目として特論 5 科目、総合実習 1 科目を設置している。

B 群（医療薬学領域）では、薬物治療の基礎となる薬効評価、それと表裏一体となった安全性、薬物自体の品質管理、患者の遺伝子背景など、薬を臨床応用する場合に必須な最先端の知識と技術を修得することを目的として講義科目として特論 5 科目、総合実習 1 科目を設置している。

C 群（実践的臨床薬学領域）では、医療人は常時最新の知識と技術を取り入れる必要性があり、基礎科学者も、医療現場におけるニーズを知り、最新技術がどのように応用されているかを意識しておく必要があることをふまえ、講義科目として特論 5 科目、実習 2 科目を設置している。実習科目 2 科目には本学と学術交流協定を締結している奈良県立医科大

学の附属病院及び独立行政法人国立病院機構南京都病院において、薬剤師の指導のもとでの解析を含み、高度な専門薬剤師職能のスキルを磨くことを可能としている。

1年次から4年次までにわたり連続して設置している研究指導科目である特別研究は、学生各自が取り組む課題やテーマにふさわしい研究指導教員によって研究の実践、指導を行い、博士論文の作成を行う(4(2)-12 p. 59)。

＜10＞生活科学研究科

生活科学研究科では、それぞれの専攻の教育課程の編成・実施方針に基づき、以下に記述するように授業科目を開設し、教育課程を編成している。

(生活デザイン専攻)

修士課程

生活デザイン専攻については、衣・食・住のデザイン追及を核にし、生活全般を見直す目的から、研究分野を「くらしのデザイン」分野と「こころのデザイン」分野の2つに分けて編成した。

さらに、授業科目をA類の演習科目とB類の講義科目に分け、設置科目を有機的に受講させる。これによって、従来の家政学の伝統を基盤として現代のくらしのあり方を系統的に学ぶことができることに特色があるといえる。

「くらしのデザイン」分野のA類では、『くらしのデザイン特殊演習A～E』の5科目と『くらしのデザイン発展演習A～D』の4科目が春学期と秋学期に配置され、B類の『生活経済学特論』『服飾文化史学特論』『衣生活デザイン特論』『食と栄養学特論』『環境学特論』『環境衛生学特論』『居住環境デザイン特論』の7科目を半期に開講する。

「こころのデザイン」分野も同様にA類は、『こころのデザイン特殊演習A～D』の4科目と『こころのデザイン発展演習A～C』の3科目が春学期と秋学期に配置され、B類の『児童文化特論』『地域子育て支援施策特論』『学校デザイン特論』『家族社会心理学特論』『生涯発達心理学特論』『生活と倫理特論』の6科目が半期に開講される。

なお、これら2分野での学習を有機的に連結するために、各々の分野での最低単位数を設定するなどの工夫を施した(4(2)-12 p. 60)。

(食物栄養科学専攻)

修士課程

食物栄養科学専攻では食物栄養科学コースと臨床栄養学コースを置き、それぞれの専門性に沿った授業科目を開設して体系的に編成している。いずれのコースも課程修了に必要な単位数は30単位である(4(2)-12 p. 61、p. 63)。

食物栄養科学コースでは、専任教授による研究指導科目としての「食物学特別研究」10単位を含む必修科目16単位以上と、食品学・調理学・栄養学の3領域で構成される選択科目14単位以上の履修を必要とする。また、臨床栄養学コースの科目から選択科目として8単位まで修了に必要な単位に参入することができる(4(2)-12 p. 61)。

臨床栄養学コースでは、管理栄養士としての職場を有する者とそうでない者でカリキュラムが異なる。管理栄養士としての職場を有しない者に対しては本学指定の施設における1年間のインターンシップを実施する「臨床栄養学実地研究」4単位、およびインターンシップ先の客員教授と専任教授との連携による研究指導科目としての「食物学特別研究」

10単位が必修となる。これに加え選択科目16単位以上の履修を必要とする。また、食物栄養科学コースの科目から選択科目として8単位まで修了に必要な単位に参入することができる(4(2)-12 p. 63)。一方、管理栄養士としての職場を有する者については、専任教授による研究指導科目としての「食物学特別研究」10単位、および「臨床栄養学特殊研究Ⅱ～Ⅴ」16単位が必修となる。これに加え選択科目4単位以上の履修を必要とする。また、食物栄養科学コースの科目から選択科目として履修し、修了に必要な単位に参入することができる(4(2)-12 p. 63)。

(2) 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。

〈1〉大学全体

本学の教育課程の編成・実施方針に従って編成されている全学共通教育カリキュラムの教育内容は以下のとおりである。

【全学共通教育】

・共通学芸科目区分

本学のリベラル・アーツ教育は、幅広い分野の知識を習得して教養を身につけることだけでなく、専門分野の知識の知識・技能をもしっかりと身につけること、さらにはそれらの学習過程においてDWCLA10として表現されている基礎的・汎用的能力を身につけること、など広い意味で理解されている。そのため、特定の科目区分や科目群がリベラル・アーツ教育を専ら担うという考え方はされていない。この理解を基本とした上で幅広い分野の学習機会を提供するため共通学芸科目区分が設けられている。人間と思想、人間と環境、人間と社会、女性と社会、文化と歴史、京都の文化と歴史、教育と人間、異文化体験、交流学生と学ぶ日本文化、キャリア教育科目などの分野に93科目を両キャンパスに設置して、幅広い分野の科目履修の機会提供の役割を果たしている。

・キリスト教・同志社関係科目区分

キリスト教・同志社関係科目区分では「聖書A」「聖書B」各2単位が必修となっている。この授業科目ではキリスト教に関する内容に加えて、本学の創立者である新島襄の生涯についても4回にわたり必ず触れることになっている。選択必修科目としては「キリスト教の歴史A～C」「キリスト教文化論A～C」「キリスト教世界の探求A～C」「近代日本と同志社A～D」が両キャンパスに設置されていて、学生がキリスト教や本学の歴史・建学の精神について多様な角度から学ぶことができるようになっている。

・外国語科目区分

表象文化学部英語英文学科と学芸学部国際教養学科を除く全学部学科の共通英語教育に関しては、一部の学科を除き2年間にわたり英語講読を中心とした科目4単位、英語コミュニケーションを中心とした科目4単位の計8単位が必修となっている。本学では英語教育を国際主義教育の中の重要な要素として位置づけて、いわゆるグローバル人材の育成を目指して教育内容の改善に努めており、英語教育の改革の第1歩として、2013年度より次の改革を行った。

(1) プレースメントテストの結果によりすべての共通英語科目において2段階の習熟

度別クラス編成を実施した。

- (2) 担当者任せであったテキスト選定を改め、専門分野の英語基礎力を高めるため、学科の専門分野に近い内容のテキストを使用した。
- (3) 全クラスにおいてTOEIC演習の内容を授業時間の3分の1程度含めることとした。
- (4) 「英語コミュニケーションⅡA、ⅡB」をNative Speaker担当科目とした。
- (5) すべての英語科目を通して、英語自習システム（ALC NetAcademy 2）の利用を奨励した。

英語以外の外国語については、ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、イタリア語、ハンガルの6言語の科目を開設している。学部学科により選択必修となっている言語は異なるが、1言語について4単位修得することが要件となっている。なお、一部の学科については選択必修の要件を課していない。

・スポーツ・健康科目区分

この科目区分には、1年次に「体育実技A、B」と講義科目の「からだの科学」「ウェルネス健康論」「食物と健康」「スポーツ文化論」を置き、全学で2単位を選択必修としている。2年次には選択科目として「スポーツ実習A、B」を置いている。

【初年次教育】

学芸学部音楽学科演奏専攻、薬学部、生活科学部食物栄養科学科を除き、各学部学科には基礎ゼミまたはそれに相当する科目が初年次に置かれ、初年次教育を担っている。基礎ゼミ科目の目指すところは新生入生に対して大学での学習方法を習得させることにあり、内容は学部学科ごとに異なるが、レポートの書き方、図書館の使い方、発表の仕方、専門分野の紹介、キャリア意識の形成を含む学習意欲の向上など、が授業内容となっている。

また、理系学部学科（薬学部及び生活科学部食物栄養科学科）では、物理、化学、生物、数学などの科目に対して、高校レベルの復習と大学で必要なレベルの橋渡しの科目を正規授業として開講している。

〈2〉学芸学部

学芸学部では、学科ごとに設定した教育課程の編成・実施方針に基づき、学士課程にふさわしい教育内容を提供している。また、各学科では、学科独自の初年次教育にあたる科目を設置し、専門的な教育に順応するための基礎的な内容を提供するとともに、キャリア形成促進のための教育に配慮した科目も設置している。

(音楽学科)

音楽学科では、能動的な学習を促すために「基礎演習科目」の充実を図るため、専任教員を主軸に嘱託講師と連携を密にしている。具体的には、学問分野の多様性から演奏専攻を3コースに、音楽文化専攻を4つの科目群に分化させているため、学生に対する指導はそれぞれに異なった対応が求められる。

(情報メディア学科)

情報メディア学科では、能動的な学習を促すために1年次に基礎演習科目を設置してい

る。基礎演習では、最初から負荷が高い課題を与え、自律性の重要さと能動的学習の必要性を認識させている。また、この演習の担当教員は、授業内容や位相を一致させるために密な連絡を取り合い、指導法の研さんに努めている。

(国際教養学科)

国際教養学科では、1、2年次の英語スキル科目では、同一科目で週2回の授業を実施することにより教育効果を高めている。国際教養科目では、多くの科目を英語で行うことにより、英語による学問的視野の拡大に努めている。4年次の演習科目では、週2回の授業を実施することにより、緊密かつ集中的な研究指導を可能にしている。留学中は教員が日本から個別指導を行うことにより、留学を国際教養学科における4年間の一貫した学びの一部として位置付けることに成功している。総じて、本学の教育理念である国際主義とリベラルアーツを具現化する教育課程となっている。

〈3〉現代社会学部

現代社会学部では、社会システム学科と現代こども学科のカリキュラム・ポリシーとしての教育課程編成・実施の方針が個別に設定されているため、学科ごとに分けてそれぞれ提示する。

(社会システム学科)

社会システム学科では、基礎的学力として、まず法律、情報処理、外国語運用能力を必要不可欠の技能として重視している。こうしたカリキュラム・ポリシーの下、1年次では、「基礎演習」、「入門・概論科目」、「法律系科目」などを中心に、「共通学芸科目」、「キリスト教・同志社関係科目」、「スポーツ健康科目」を履修する。これらは基礎学力としての重要性に鑑みて、「共通学芸科目」を除き、必修もしくは選択必修となっている。2年次以降は、主として「応用・各論科目」からなる5コースに置かれた多様な専門科目を、自己成長のために知識を増やし視野を広げるべく、学生自らが将来の志向に合わせて自由に履修する。こうした基礎の上に、3年次の「ゼミナール科目」を中心に専門的領域を本格的に深め、4年次において集大成となる卒業研究をまとめる。加えて、英語特別プログラムでは、ネイティブ教員による総合的な英語運用能力の向上に努めている。

(現代こども学科)

現代こども学科では、具体的な「導入科目」として『基礎演習』『現代こども学概論』が1年次春学期の必修科目として設置されている。『基礎演習』では大学での学習の基礎となるアカデミック・スキルを身に着けるとともに学科への導入教育を行っている。また、1年次秋学期では『こども学演習』を設定し、『基礎演習』を継続発展させている。『現代こども学概論』においては、一つのクラスを専門分野の異なる複数教員がオムニバス形式で指導し、基礎教育の観点にもとづき多様なアプローチを行っている。この『現代こども学概論』と併せて『教育とこどもの社会史』『こどもの発達心理学』も1年次の必修科目として設置し、これらの科目を、こども理解に関わる基本的根底的授業と位置づけている。

他に応用・各論科目では、『フィールドワーク入門』を1年次秋学期の必修科目として設置し、現場体験および広い社会的視野の形成の方法論としての基礎教育を行っている。また、「学びと育ちの内容」「学びと育ちのアート」「こども学の実践」の科目群に分けてそれぞれの群に必修および選択科目を設置している。これらを3年次の『応用演習』4年次の

『卒業研究』における自らのテーマの集大成に繋げていく。

＜4＞薬学部

本薬学部の理念・目的を達成するために編成された教育課程に基づき、表に示したカリキュラムを編成し、授業科目を配置している。薬学部の卒業に必要な最低単位数は190単位である。

薬学生の初期の段階から医療人として生命に関わる薬学専門家にふさわしい行動を身につけるとともに、リベラル・アーツ教育として1年次生に「共通学芸科目」、「キリスト教・同志社関係科目」を配置している。国際的な活動も視野に入れた医療人の育成のために「外国語科目」を1年次から4年次まで提供し、英語のネイティブスピーカーによる講義科目「英語コミュニケーションIA、IB」を必修としている。また、6年次には南カリフォルニア大学との提携による海外実務研修プログラム（単位外）と「医療薬学海外事情」を置いて海外の医療を実体験する機会を提供している。1年次生に対して「早期体験学習」を実施し薬剤師のあり方や調剤あるいは製剤に関連する基本的技術や考え方を学び、薬学での学習へのモチベーション向上を図り、PBL（Problem Based Learning）を通して、与えられた課題について学生が考え調査をし、さらにグループで話し合っ解決していくことを学べるように工夫している。「臨床医学概論」の講義では、医療の目的、生命倫理など医療人としての基本的理念を習得し、「薬学概論」では、医療人となるために必要な薬学専門科目の重要性を認識させるようにしている。

2、3年次では各種薬学専門37科目の講義および実習を通して、薬学専門家として当然知っておくべき基本的に必要な知識、さらにより高度な医療薬学的知識および技能が習得出来るようにしている。4年次では、多数のより専門的な薬学教育科目を修得し、「模擬病院・薬局実習」及び「実務実習事前学習IA、IB、IIA、IIB」を行うことにより、調剤、製剤、服薬指導などの薬剤師として必要な基本的「知識」、「技能」、「態度」を習得するとともに、学生同士の模擬患者の参画による臨床コミュニケーション能力の醸成ができるようにしている。

さらに「医薬品情報学」、「医療安全性学」などを4年次に開講し、医療を受ける者、他の医療従事者に対しての薬の情報を提供出来る知識が身につくようにしている。また、「内科学総論」、「臨床検査学」、「薬局管理学」、「薬事法規・制度」、「日本薬局方概論」などの科目を置き、薬学専門家としての知識を身につけることにより、他の医療従事者との信頼関係の構築に役立つようにしている。

5年次では、実務実習教育が行われる。半年間の医療現場での実習を通して、真の医療人としての教育、他の医療従事者や医療を受ける者との相互信頼関係を構築するための「知識」、「技能」、「態度」などを習得する。6年次は、より高度な専門知識として各分野の特論科目を選択必修科目として配置している。

また、4年次から6年次には、全学生に研究室配属を課し、卒業研究科目として「薬学研究I、II、III」を配置し、専門研究を通して問題発見・解決能力、論理的思考能力の醸成を行う。

薬学教育カリキュラム構築体制およびカリキュラム変更体制として、薬学部運営委員会、薬学部教員会議で検討し、教務主任会、カリキュラム委員会、教授会にて決定する体制が

すでに確立されている。

〈5〉表象文化学部

表象文化学部では、個性豊かで、将来どのような世界においても優れた人材として貢献できる、自立した人間の育成を目標としている。そのために、学生生活をとおして、幅広く深い教養を培い、精神と人格の陶冶を図るとともに、専攻する学問の基礎から最先端にいたる知識と研究方法を身につけることができるよう教育課程を編成している。学生は、1年次より学科科目課程でテーマを選び、深く追求していくが、一方で、本学に学ぶ誰もが共通に身につけるべき教養、総合的な判断力を「共通学芸科目」の履修をとおして関連分野を学修し、自分が専攻する学問領域を客観的に見ることが出来る姿勢を育てて行けるようになっている。各学科の取り組みは以下のとおりである。

(英語英文学科)

英語英文学科では、大学での学びに順応するために、1年次では、「Writing Skills」をアドバイザーが担当し、英作文の指導を通じて、学生の学力に応じた勉強の仕方を指導している。2年次では「Introductory Seminar」で、クラス編成を1年次クラスからの持ち上がりとし、アドバイザーを入れ替え、アカデミック・スキルの基礎を学ばせるのと同時に学生指導も行っている。3、4年次では専門教育へと移るが、英語力を落とさないために、ネイティブ・スピーカー教員が担当する「Academic Skills」を必修にしている。さらにTOEICを1年次から3年次まで全員受験させ、TOEFLは1、2年次に全員受験させ、英語力の向上と留学へのモチベーションを高めている(4(2)-10)。

(日本語日本文学科)

日本語日本文学科では、1年次から4年次の教育内容を通し、卒業後の実社会で生きる知識・態度・技能を涵養している。1年次では、「基礎リテラシー」を必修科目として設定し、新入生が大学での学びに適応できるよう、その教育内容を工夫している。演習形式の学びを通して、基本的なアカデミックスキルを身につけ、論文作成の基礎的知識を習得する。さらに学生間の親密な人間関係を形成することを目的としている。10数名前後の少人数クラス編成とし、各クラス担当教員がアドバイザーを兼ね、1年次学生の大学生活へのサポートを行っている。

3年次にはキャリア形成を促進するため日本語日本文学科の学びに特化した実習先での「インターンシップⅡ」を科目として開講し、実習先での学習体験等を下級年次生に公開する報告会を開催している。

また、2年次以降の「ゼミナール科目(「基礎演習」「演習」「卒業研究」)」を必修科目として設定し、学科学生全員が各研究室に所属し、課題発見能力、課題解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力などを陶冶する。さらに4年次の「卒業研究」では、卒業論文の執筆作業を通し、情報収集、討論、論文作成、プレゼンテーションなどの能力を育成する。なお、「卒業論文」は卒業論文発表会にて各研究室の優秀な研究成果を発表し、下級年次生も多数聴講し、将来の卒業論文執筆の参考としている。

〈6〉生活科学部

生活科学部では、それぞれの学科の教育課程の編成・実施方針に基づき、以下に記述す

るような教育内容を提供している。

(人間生活学科)

人間生活学科では、1年次から4年次の教育内容を通し、卒業後の実社会で生きる知識・態度・技能を涵養している。1年次では、「人間生活学基礎演習」を必修科目として設定し、新入生が大学での学びに適応できるよう、その教育内容を工夫している(4(2)-11 p. 46, p. 150~151)。演習形成の学びを通して、基本的なアカデミックスキルを身につけ、人間生活学の基礎的知識を習得する。さらに学生間の親密な人間関係を形成することを目的としている。10数名前後の少人数クラス編成とし、学科の全専任教員がクラスを担当するとともに、各クラス担当教員がアドバイザーを兼ね、1年次学生の大学生活へのサポートを行っている。

3年次にはキャリア形成を促進するため人間生活学科の学びに特化した実習先での「インターンシップⅡ」を科目として開講し、実習先での学習体験等を下級年次生に公開する報告会を開催している(4(2)-11 p. 127~129)。

また、3年次以降の「ゼミナール科目(「応用演習」、「卒業論文」)」を必修科目として設定し、学科学生全員が各研究室に所属し、課題発見能力、課題解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力などを陶冶する(4(2)-11 p. 50)。さらに4年次の「卒業論文」では、卒業論文の執筆作業を通し、情報収集、討論、論文作成、プレゼンテーションなどの能力を育成する(4(2)-11 p. 119~126)。なお、「卒業論文」は卒業論文発表会にて研究成果を発表することが義務付けられている。

(食物栄養科学科)

食物栄養科学科では1年次春学期において、大学で必要な分野の学習を高等学校で選択できなかった(あるいは理解が不十分な)学生向けに「生物の基礎」「化学の基礎」を選択もしくは選択必修科目として設置している(4(2)-11 p. 56)。また、各専攻とも年に1回特別講義を開催し、卒業生を講師に招いて大学での学びがキャリア形成にどのように生かされたかを講演してもらう。

食物科学専攻では、初年次教育として1年次春学期に、食物科学専任教員全員と嘱託講師がリレー式で担当して大学での学習方法の習得や主体的に学ぶ態度を涵養しつつ、生活科学部の中の食物科学の学問的位置づけを概説する「生活科学概論」、および4年間の本専攻での学びの導入科目としての「食生活論」を必修で設置している。また、「食物学のための数学と物理」を選択で置いている(4(2)-11 p. 54, p. 203)。3年次にはキャリア形成を促進するため食物科学専攻の学びに特化した実習先での「インターンシップⅡ」を置き、実習先での体験を下級年次生に公開する報告会を開催する(4(2)-11 p. 129~130)。4年次には通年必修で卒業論文を履修することにより、DWCLA10のすべての能力と科学論文検索や資料収集、討論、論文作成などの能力を育成する(4(2)-11 p. 127)。

管理栄養士専攻では、初年次教育として1年次春学期に「栄養素の化学」を必修で設置しつつ、専門基礎科目から専門科目まで順次的・体系的に配置して、3年次2月から始まる臨地・校外実習までにはほぼ全ての専門科目を学び終わるようカリキュラムを編成している(4(2)-11 p. 64)。4年間で138単位以上を履修する必要から時間割が過密であるため、各学年とも授業外のオリエンテーションで初年次教育、キャリア形成教育の内容を補っている。また、臨地・校外実習の事前指導科目である「総合演習B」では、病院、行政、福祉

施設等で管理栄養士として働く本専攻卒業生をゲストスピーカーとして招いてキャリア形成教育の一助とする(4(2)-11 p.229)。合計4週間の臨地・校外実習はインターンシップそのものであり、実習後には実習先ごとの報告会を開催して下級年次生に公開する

(4(2)-11 p.239~241、p.243~244)。4年次の卒業論文は選択科目であるが、約9割の学生が履修しており、DWCLA10のすべての能力と科学論文検索や資料収集、討論、論文作成などの能力を育成する(4(2)-11 p.127)。

〈7〉文学研究科

文学研究科では、すべての分野に研究の最前線で活躍している専任教員を擁しており、学生は自らの研究テーマに応じて、いつでも適切な指導を受けることが出来る体制をとっている。博士前期課程では、高度な学識を養い、研究能力を高めるべく、指導教員の下で研究に勤しみ、その成果として「修士論文」を作成していけるように、また、博士後期課程では、研究者としての自立を目指して研究を深化、発展させ、その成果として「博士論文」を作成できるよう授業科目は編成されている。

(英語英文学専攻)

博士課程(前期)

英語英文学専攻博士課程(前期)におけるA類科目は、研究の専門性を深めながら関連領域の知識を習得する教育内容を提供している。またB類科目は、研究の幅を広げ、様々な研究方法やテーマについて学ぶ教育内容を提供している。A類の「Colloquium(文学)」 「Colloquium(言語)」(論文テーマの分野に従ってどちらか1科目を1年次の春学期に必修)では、修士論文執筆のために必要な研究方法や先行研究について学び、論文に必要なリサーチを行っている。またB類の「Academic Writing A・B・C・D」(いずれか1科目を選択必修)により、高度な専門性を学びつつ、表現・発信できる英語運用能力の更なる向上をめざす。これらは、2年間での英語による修士論文執筆を支援する科目である。

博士課程(後期)

英語英文学専攻博士課程(後期)では「特別研究」を設置して、イギリスの小説と詩、言語学、文学作品翻訳に関する教育内容を提供している。また個別指導を通して博士論文作成を支援している。

〈8〉国際社会システム研究科

本研究科では国際社会と国際組織、国際交流、教育に関する知見を広げ、現代社会の諸領域について専門的知識を修得し、論理的思考を養うため、「国際協力と国際組織」「国際交流と社会」「現代社会と文化」「現代社会とこども」の四分野にA類科目(選択必修)ならびにB類科目(選択)を設けている。

その成果は、修士論文の作成並びに審査過程を通じて、学生に体化される。

〈9〉薬学研究科

本研究科では、3つの分野(A群:基礎薬学領域、B群:医療薬学領域、C群:実践的臨床薬学領域)のいずれの研究指導を受ける学生も、それぞれ他分野領域の特論(講義科目)・実習科目を系統的に履修し、広い範囲の高度な知識と技術を修得する。これによって、

3つの分野の領域が有機的に連携し、個々の学生の研究課題の系統的な深化を図ることが可能となる点に特色がある。また、実習科目はA群（基礎薬学領域）1科目、B群（医療薬学領域）1科目、C群（実践的臨床薬学領域）1科目が必修科目として配置し、従来の4年制課程を基礎とした博士前期課程に比べ実務実習以外の知識・技術が未修得であった分を回復することができる。このことにより、「臨床の知識を生かす研究を遂行可能な基礎薬学研究者」、「臨床現場において、基礎薬学的知識を応用可能な専門的薬剤師」としての素養を涵養し、『臨床』を意識した高度な教育・研究が展開されることとなる。また、C群（実践的臨床薬学領域）における実習科目2科目は、前述のとおり医療現場における実習を通して臨床薬剤師または専門薬剤師をめざす高度な専門薬剤師職能のスキルを磨く科目であり、それを配置していることにも特色がある（4(2)-13）。

＜10＞生活科学研究科

生活科学研究科では、それぞれの専攻の教育課程の編成・実施方針に基づき、以下に記述するような教育内容を提供している。

（生活デザイン専攻）

生活デザイン専攻では、「くらし」をめぐる自然・社会・人間・文化・こころに関する高度な研究能力・デザイン能力・実践力を養成する。「くらしのデザイン」分野では多様化するくらしとくらしを取り巻く環境のデザインを考察する。「こころのデザイン」分野では社会とともにあるこころの在り方を、くらしのなかのこころから追及する。また、多彩な科目を自由に履修して研究を進めることができるほか、職業や家族を持っている人も研究活動しやすいよう、開講時間についても配慮されている（4(2)-12 p. 60）。本専攻修了後は、企業・行政・団体・学校などにおいても高度な専門性を持った「くらしの達人」として活躍することが期待されている。

（食物栄養科学専攻）

食物栄養科学専攻のうち食物栄養科学コースでは、食品学・調理学・栄養学の3領域および臨床栄養学コースの科目から14単位以上を学生が選択して履修する（4(2)-12 p. 61）。また、1年次秋から2年次秋に開講される「食物栄養科学演習Ⅰ・Ⅱ」では、学生の研究テーマに関連した英語研究論文を講読することで研究手法を理解し、各自の研究の発展的展開に役立てると同時に、その内容を専任教授や学生の前でプレゼンテーションすることにより研究成果発表力を養成する（4(2)-12 p. 239）。

臨床栄養学コースでは、管理栄養士として高度で実践的な知識を獲得するために、病態栄養学を中心とした講義科目を多く配置している。このコースの学生は、NST（Nutrition Support Team）や栄養指導等を中心とするインターンシップ、もしくは管理栄養士として臨床現場における研究活動を行うので、「臨床栄養学特殊研究Ⅰ～Ⅴ」は夜間に開講している。また、幅広い関連分野に関する知識を獲得できるよう、食物栄養科学コースの科目も選択できる（4(2)-12 p. 63）。

2. 点検・評価

●基準4「教育内容・方法・成果」（2）教育課程・教育内容の充足状況

教育課程の編成・実施方針に基づき、科目区分を設け、科目を体系的に開設している。

リベラル・アーツ教育の理念を実践するため、全学共通科目に加え、学部学科の垣根を低くして豊富な他学部・他学科を学生に提供しているほか、他大学の多様な科目を履修する機会を提供している。また、ほとんどの学部学科において初年次教育を担う科目を設置し、理系学部学科では、いくつかの分野について高校レベルの復習と大学で必要なレベルを橋渡しするような正規科目を置いている。

よって、同基準をおおむね充足している。

①効果が上がっている事項

〈1〉大学全体

【多様な科目の履修機会の提供】

他学科科目の履修制度、他大学との単位互換制度や国内の大学との学生交流制度により、本学は、全学の学生に対して多様な科目の履修機会を提供しており、リベラル・アーツ教育の一つの目的である幅広い視野を拓く教育は効果をあげている。それぞれの制度における履修者数は(4(2)-14 項目9～17)のとおりである。

特にリベラル・アーツ教育の観点から、本学の学部学科間の垣根は非常に低いものとなっており、多くの科目が他学部他学科の学生にオープンになっている。特に文言化された規則はないが、本学では、かなりの知識が要求される科目、実験・実習科目、厚生労働省の監督下にもある科目、ゼミ科目などの特別な理由がない限り、原則として他学科生を受け入れることが了解されている。

本学はキャンパスが2か所に分かれているが、他キャンパスでの開講科目を含め多くの学生が他学部他学科の科目を履修している(4(2)-14 項目9～10)。

〈2〉学芸学部

学芸学部では、学科毎に設定した教育課程の編成・実施方針に基づき、学士課程にふさわしい教育内容を提供している。学科毎に次のとおり提示する。

(音楽学科)

音楽学科では、総合大学であることから、音楽を専門的に学ぶのと並行して、音楽学科および他学科が提供している「共通学芸科目」を履修することができ、幅広く学べる環境がある。2013年同志社女子大学新入生アンケート報告者において、入学する大学として同志社女子大学を選んだ理由として「学科の枠を超えていろいろな学問が広く学べるから」の選択率が音楽学科では高く、特に音楽文化専攻においては20.8%となっており高い。また「総合大学だから」という理由においても、音楽演奏専攻22.2%、音楽文化専攻27.1%(学内で最高値)となっている。2013年度春学期の授業に関するアンケート全実施科目集計結果において、「授業に意欲的に取り組みましたか」4.28、「教員の話は聞き取りやすかったですか」4.20、「授業内容はシラバスにあったいましたか」4.24など、高い評点平均値となっている。DWCLA10のうちで、履修を通して獲得や向上に役立ったと感じられるものとして、思考力、分析力、想像力、自己表現力の選択率が高く、授業の効果があがっていることが推し量られる。

(情報メディア学科)

情報メディア学科では、卒業演習・制作に直結するゼミナール科目を2年次の秋学期か

ら開始し、本格的な卒業研究を深めて行くためのカリキュラム構成を取っている。ゼミナール科目への導入をスムーズにするために1年次の春学期に「情報メディア基礎演習」を必修として設置しており、低年次から、非常に高い創造力とプレゼンテーション力を育成することを目指している。

また、学科の特色を生かすために「メディアデザイン」「メディアコミュニケーション」「メディアテクノロジー」「メディアプロデュース」の4つの分野で学びを展開し、ユニークな発想を生み出す力を育成している。2013年度春学期の授業アンケートでは、DWCLA10のうち「創造力」の選択率は全学のなかで最高値(41.6%)を示し、全学の平均値(19.1%)の2倍を超えている。「プレゼンテーション力」の選択率は全学のなかで4番目(18.0%)を示し、全学の平均値(13.1%)を上回っている。したがって、学科の目指す教育内容と学生の満足度は合致し、授業の効果があがっていることがわかる(4(2)-15 p.25)。

(国際教養学科)

国際教養学科では、2012年12月実施の在学生アンケートでは、1年次生対象の在籍する学科への満足度に関する項目で、国際教養学科に入学して「とても良かった」と回答した者が69.8%、「まあまあ良かった」と回答した者を合わせると95.4%に達している。これらの数値は、いずれも4月オリエンテーション時に実施した新入生アンケートにおける同項目の数値を上回っており、一方、否定的な回答は皆無である。したがって、学生は本学科の教育内容に概ね高い満足を得ていると言える(4(2)-16 p.13)。

〈3〉現代社会学部

現代社会学部では、社会システム学科と現代こども学科のカリキュラム・ポリシーとしての教育課程編成・実施の方針が個別に設定されているため、学科ごとに分けてそれぞれ提示する。

(社会システム学科)

社会システム学科では、基礎的知識の習得を目的とする「入門・概論科目」を5つのカテゴリーに分け19科目を設置しており、学生は自らの知的欲求に応じて履修することができる。こうした選択は、社会システムに係る導入的な学習を幅広く行うとともに2年次以降に自らの専門領域とするコース選択の動機付けになっている。

入学直後の1年次生が必修として履修する『基礎演習』では、「基礎演習マニュアル」を配布し、図書館や情報機器の使い方、口頭発表の準備およびレジメの書き方、レポートの準備の仕方とレポートの書式、またディベートや討論の方法など、大学での学びにとって基本的かつ必要不可欠なスキルに関する教育を行い、高校から大学教育へのスムーズな移行を促す役割を果たしている。

英語特別プログラム「CASE」では、実社会や大学院で必要とされるハイレベルな英語運用能力の習得を目的として、全科目がネイティブスピーカー教員による指導によって行われ、受講学生の実践的な英語能力を培い、多くの海外留学生を生み出し国際的視野を持った人材教育に寄与している。また中国語、フランス語、ドイツ語でも、「CASE」と同様な「ラピート」プログラムが設けられ効果をあげている。

(現代こども学科)

現代こども学科では、総合大学であることから、「共通学芸科目」として多分野かつ多数

の全学共通教養教育科目を提供している。

初年次教育を目的とした『基礎演習』『こども学演習』『現代こども学概論』『フィールドワーク入門』の設置により、1年次生が「学ぶ姿勢」や専門分野の研究手法を習得して高等学校での学びから「大学での学び」への転換を図って専門教育への円滑な移行を図ることができている。

1年時には「入門・概論科目」に選択必修科目を3科目（『遊びの社会学』『児童文化論』『こどもと風俗』）、「こども学」に対する興味を喚起している。並行して選択科目を4科目（『社会学概論』『倫理学概論』『教育学概論』『社会心理学概論』）を設置し、これからの学修を進める上での基本的な枠組みを学ぶことができる。

2年次の「入門・概論科目」の選択必修科目では8科目（『教育社会学』『こども福祉論』『地域社会とこども』『国際スポーツ文化論』『ユニセフ子ども支援』『世界のこども政策』『こども産業論』『社会福祉論』）、選択科目では5科目（『生涯発達心理学』『ジェンダー論』『生命の倫理』『社会的養護』『保育の心理学』）を設置し、1年次の学びを発展させてより広い視野からこども学を追及できるようにしている。

全学年を通して「応用・各論科目」の選択必修科目、選択科目のなかから自らの興味・関心に基づき科目が選択できるよう学際的・専門的科目を提供している。また、学生の小学校および幼稚園教員免許・保育士資格取得に対する希望が強く、1年次から4年次までをとおして、こども学の学びを追求しつつ免許・資格対応した科目編成を行っている。

＜4＞薬学部

本学は総合大学であることから、他学部で開講している多数の「共通学芸科目」が選択でき、一般教養科目を幅広く学べる機会がある。また、建学の精神の一つとして国際主義を掲げており、5年次を除くすべての学年に英語科目を置いている。

新入生の入学前の学習背景には個人差が大きく、学力差のみならず理系科目の数学、物理、化学、生物のうち高校で未履修だった科目の学力不足解消が大きな課題である。薬学部では、入学生がどの程度学力があるかを図るために、これら4科目に対し入学オリエンテーション時にプレースメントテストを実施し、さらに高校から大学への学習の橋渡しを円滑におこなえるよう高校レベルの補講を行っている。また、基礎教育科目として「基礎数学」、「基礎化学」、「基礎生物学」および「基礎物理化学」を1年次春学期に開講し、秋学期から開講される薬学専門科目への学習移行が容易になるようにしている。

1～4年次に学ぶ薬学専門科目については、各学期中頃に中間試験を実施し、各科目の理解度の確認を行うとともに、膨大な内容をより確実に知識として習得できるようにしている。また、講義が一方的な教授にならないよう、クリッカーの導入を行い、理解度を把握しながら講義できる体制を作っている。さらには、2、3年次の重要専門科目では、講義をビデオ撮影し、学生が講義内容を復習し理解するための助けとしている。

大学独自の薬学専門教育のうち、『早期体験学習』は薬学を専攻した学生のモチベーションの向上に非常に役立っている。これは早期体験学習後の学生による発表資料、および見学施設宛の礼状からも明らかである。“薬剤師”すなわち“薬の調剤”という短絡的なイメージが払拭され、薬剤師は医療に直接携わる医療人であるという認識が低学年から芽生え、医療人としての倫理観やコミュニケーション能力の醸成の必要性や重要性を認識し

てきている。6年次に配当されている多彩な専門領域の知識を提供する11科目の特論科目は、学生が各自の専門性を選択する助けとなっている。

国際主義に関しては、南カリフォルニア大学における海外研修を行った学生における意識の向上は著しく、非常に効果的なプログラムである。特に、日本の実務実習を修了した上で米国の医療現場を経験するという本プログラムは、効果が高いものである。

全学年を通して「専門知識」、「技能」、「態度」や研究能力を備えた薬剤師および医薬品開発研究者を育成するため、体系的かつ独自の教育プログラムが実施されている。

〈5〉表象文化学部

英語英文学科について、2013年度の協定留学生（19名）のうち、英語英文学科生は16名を占めた。英語英文学科の学生の留学希望者率は上昇傾向にある。

日本語日本文学科では、表象文化学部の理念に基づいて作られた「表象と表現」科目群が、従来の学科にはないものとして好評である。

〈6〉生活科学部

人間生活学科では、「人間生活学基礎演習」等を通し、初年次教育の充実を図っている。2013年度には、当該科目の中で、キャリア講演会を実施し、本学科の卒業生を数名招き講演並び懇談の機会を提供した。初年次教育において、学科の全専任教員が担当クラスのアドバイザーであることが、行き届いた学科教育を実践する基盤を作っている。

食物栄養科学科では、カリキュラム構成が体系的に組まれていると学生自身が感じている（4(2)-17 p. 39食物栄養科学科 自由記述）。

〈7〉文学研究科

英語英文学専攻博士課程（前期）では、2010年にカリキュラム改正を検討し、2011年よりセメスター制を導入し、また専門領域の縛りを軽減（A類科目の必要修得単位数を16から10に軽減）した。その結果、科目選択の幅が広がり、専門分野の研究と並行して多分野の勉強も促進されている。

〈8〉国際社会システム研究科

2004年の開設時から2012年度末までの修士学位取得者は、「国際協力と国際組織」7名、「国際交流と社会」4名、「現代社会と文化」10名、「現代社会とこども」1名である。

学位取得者は、国際社会の課題と向きあい、国際社会における共生の道を探り、グローバル社会に貢献し、指導的な役割を果たす職業人および研究者になりうる資質を身に付けたと評価される。

〈9〉薬学研究科

6年制薬学部の上にある4年制博士課程に要求されるすべての領域を、A、B、Cの3分野に分けて提示し、学生が将来を見据えやすい構成をとっている。また、6年制学士課程を補完すべく、基礎能力を充実させる仕組みも取り入れている。

＜10＞生活科学研究科

生活デザイン専攻では、幅広いニーズをもつ学生の修学の選択肢を広げるため、昼夜開講のシステムを採用している（4(2)-12 p. 60）。自分に適した時間配分で開講科目を履修できる本システムを活用することによって、より円滑な家庭科教員免許の取得が可能となった。

食物栄養科学専攻のうち特に食物栄養科学コースでは、2013年度から各選択科目が1セメスター2単位となり、選択の幅が広がった（4(2)-12 p. 61～62）。

②改善すべき事項

＜1＞大学全体

【ナンバリング】

科目の体系性および順次性の箇所述べたとおり、本学の学部学科の科目は科目区分、年次・学期配当、科目名による難易度表示により、体系性と順次性が確保されている。ただし、大学院科目を含め、ナンバリングは実施されていない。

【共通英語教育の改善】

全学の共通英語に関しては【外国語科目区分】の現状の説明における記述のとおり2013年度から5項目にわたる改革を行ったが、PDCAサイクルによる改善を図るため、次の点におけるさらなる改革が必要である。

- (1) 到達目標の設定
- (2) 成績評価基準の統一
- (3) 非常勤講師への過度の依存度（ほぼ100%）からの脱却
- (4) 到達度測定の実施
- (5) 授業内容や教授方法の改善

【英語で実施する科目の増設】

英語で英語スキルを教える科目を除き、英語で特定の学問分野を取り扱ういわゆる英語コンテンツ科目は、2012年度には全学で80科目（欠講科目を除く）設置されている（資料4(2)-18）。しかし、特定の学科に置かれているため、グローバル人材育成の観点から見て十分とは言えない。今後はグローバル教養に関する分野などを中心として英語で実施する科目をさらに増設し充実させ、より多くの学生に正規留学ができる英語力を身につけさせるとともに、正規留学生や交換留学生を受け入れる体制を整備する必要がある。

＜2＞学芸学部

国際教養学科では、3、4年次対象の選択科目で、英語が使える科目が少ないことが課題である。

＜3＞現代社会学部

現代社会学部では、社会システム学科と現代こども学科のカリキュラム・ポリシーとしての教育課程編成・実施の方針が個別に設定されているため、学科ごとに分けてそれぞれ

提示する。

社会システム学科では、多様な分野にわたる科目群を提供し、学生が主体的に科目を選択するオーダーメイドの学びを最大の特徴として推進しているが、これは反面で学生の側に明確な目的意識がなければ体系的な学びや専門性を深めることが希薄となる危険性がある。このため、学生の学習意欲を高めるとともに、そのモチベーションを常に維持することが求められる。いっぽう、本学科では、多様な専門科目からなる5コースが設置されているが、各コースの特色・独自性が必ずしも明示的ではなく、またコース内での共通理解やゼミ間の差異に関しても再検討する必要がある。

現代こども学科では、全学共通教養教育科目の目的は、カリキュラム・ポリシーにおいて明示しているものの、全ての学生がそれらを十分に理解したうえで履修科目の選択を行っているとは言いがたい。当該科目を履修する際の学生の目的意識がともすれば教員免許・保育士資格取得に対する希望を先行させがちであり、科目選択に際しての偏りが見られる。

〈4〉薬学部

おおむね、カリキュラムは順調に実施されているが、5年次生は、約半年間にわたる病院・薬局での実務実習により、大学内での薬学専門科目の学習が全く行われていないことから、今まで学んだ薬学専門知識、特に基礎科目のレベル低下が懸念される。これは、新5年次生と新6年次生を対象とした4月初めに行う全く同じ問題を用いた実力テストの成績に関して、新6年次生の成績が新5年次生よりも低いという事実から明らかである。5年次生に対する学力向上の対策が必要と考える。

〈5〉表象文化学部

英語英文学科では、スキル科目（reading、speaking、listening、writing）の横の連携をより強化し、英語の4技能をバランス良く向上させる必要がある。また、3年次になるとスキル科目の必修が減るため、英語力に伸び悩みが見られる。1年次から4年次まで、常に英語力を伸ばし保つ方策を検討している。

日本語日本文学科では、時代別に細分化されすぎている古典分野の科目を、整理・統合する必要がある。

〈6〉生活科学部

人間生活学科では、全ての学生が学科及び全学的カリキュラムを充分理解した上で履修登録を行っているかは疑問が残る。当該科目を履修する際、学生の目的意識にバラつきがある現状を否めない。

〈7〉文学研究科

情報文化専攻では、収容定員に比べて入学者の数がやや少ない。今後、大学院生確保の努力をする方向で解消に努める必要がある。

〈10〉生活科学研究科

食物栄養科学専攻のうち、臨床栄養学コースの学生は管理栄養士免許取得者であるのでキャリア意識は明確であるが、食物栄養科学コースでは修了後の展開を明確に示すことが難しい。

3. 将来に向けた発展方策

①効果が上がっている事項

〈1〉大学全体

【多様な科目の履修機会の提供】

多様な科目の履修機会の提供は、他学科科目履修制度や他大学との単位互換制度などにより既に十分に行なっているが、これらの制度を活用する学生がさらに増えるよう、履修説明会でより詳しく紹介する。他学科科目履修については、これほど多様な他学科科目の履修が可能となっているのはリベラル・アーツ大学の特徴であることを強調するとともに、他大学単位互換科目の履修については、学内の募集要項を一冊にまとめて利用しやすくするなどの工夫を行う。機会があれば、他大学との単位互換制度についても拡大していきたいと考えている。

他学科科目履修による副専攻制度を設けているのは表象文化学部の英語英文学科と日本語日本文学科間のみである。他学科科目履修制度により多様な分野の科目を履修することはリベラル・アーツ教育の観点から望ましいことであるが、幅広く履修するだけではなく、主たる専門分野以外に特定の分野の科目を副専攻としてある程度深く学ぶことも価値あることである。他学科科目の履修を奨励するためにも、副専攻課程を増設することについては教務部主任会等でしばしば検討しているが、具体化に向けて審議を進める。仮の案としては、グローバル教養副専攻、キャリア副専攻、特定の学科科目による副専攻（音楽副専攻、日本文学副専攻など）が考えられる。

なお、在学生アンケートの満足度を問う項目に「幅広い分野の学習（他学科科目履修や他大学単位互換科目履修）」に関する内容が入っていないので、今後は含める必要がある。

〈2〉学芸学部

音楽学科では、音楽を専門に学びながらも、他学科科目の履修や国内他大学科目の履修方法などについて、オリエンテーションや各種説明会などで案内し、学生が更に幅広く学べるように促していく。

情報メディア学科では、4つの分野で学びを展開することにより、独創的な発想力が育成されるとともに、高度な想像力やプレゼンテーション力が体得されている。これらの諸能力が、最終学年に実施するゼミナール科目の発表会を通してさらに高められるよう検証していく。

国際教養学科では、教育内容に関する満足度は概ね高いものであるが、現行カリキュラムは3、4年次対象の選択科目で英語が使える科目が少なかった。そこで、2014年度から、英語スキル科目も充実させ、より学生のニーズに見合うカリキュラムに変更する。

〈3〉現代社会学部

現代社会学部では、社会システム学科と現代こども学科のカリキュラム・ポリシーとし

での教育課程編成・実施の方針が個別に設定されているため、学科ごとに分けてそれぞれ提示する。

社会システム学科では、2013年度からのカリキュラム改正を行った。この改正では、本学科の5つのコースにおける専門領域を勘案し、「応用・各論科目」を中心に設置科目の新設、廃止、移行、年次変更などを行った。

本学科では、2011年度から5コースのゼミすべてが参加する「卒業研究発表会」が開始されるようになった。これにより、従来、コースやゼミを超えて交流する機会がなかった本学科において、全学生が一堂に会し互いの卒業研究を知り批評することが可能となった。

現代こども学科では、学生の科目選択の自由度を確保しつつ、履修の体系性、順次生を維持していくために、履修モデルを示しており、学生の科目選択に役立っている。こども学関係科目のさらなる質向上に向けて、絶えず検討を行っている。

グローバル化に対応したプログラムについては、『海外こども事情A』および『海外こども事情B』は、海外でのこどもの生活環境を実地に見学・研修できる内容であり、選択科目であるが参加者数は一定数確保できている。

＜4＞薬学部

これは本学のみの問題ではないが、近年の薬学部志望者の学力低下が著しく、薬学専門科目の履修に耐えられない学生が増加している。新入生のリメディアル教育は他大学においても喫緊の課題であり、現在の仕組みをもっと充実させる必要がある。これには現在のような座学による補習のみでなく、理科系の思考を強化する新しい教育技法の導入が望まれる。本年度、薬学コアカリキュラムの改訂が行われたので、2年以内にカリキュラムの大幅な改訂が必須である。この機会に、教務部との連携を密にしながら効果的な仕組みを取り入れるべく、学部長、学科主任、教務主任、基礎教育委員長、実務教育委員長をメンバーとしたワーキンググループを組織し、2015年度入学生のカリキュラム改正を目指している。

6年次の海外研修プログラム（8月下旬実施）は非常に教育効果の高いものであり、是非とも継続が望まれる。しかしながら、近い将来、就職活動が卒業年次の8月開始となる可能性が高い。すると、もっとも就職活動が活発な時期と海外研修が重なってしまう。日本での実務実習経験は必須であり、5年次の実習時期が自由に設定できない現状では、プログラムの継続が非常に困難となる。これが現在の最大の課題である。

＜5＞表象文化学部

英語英文学科では、2009年度のカリキュラムの抜本的見直しの結果、反省点を踏まえて、2014年度の新カリキュラムを実施する運びとなった。

日本語日本文学科では、「表象と表現」科目群のさらなる発展を図っていきたい。

＜6＞生活科学部

人間生活学科の初年次教育については、授業評価アンケート等による検証を通して、教育効果をより一層高めることができるよう、「人間生活学基礎演習」の教育内容・方法の充実を図っていく。インターンシップⅡの受入先等の一層の開発を通し、学科の特性を生か

したインターンシップ実習の充実を図っていく。

食物栄養科学科では、より一層初年次教育を充実させる。キャリア形成教育においても、インターンシップ実習等の成果を下級年次生により広く公開することで、早くからキャリアへの意識形成を促す。

〈7〉文学研究科

英語英文学専攻博士課程（前期）では、学生の科目選択の自由度を確保しつつ、履修の体系性、順次性を維持してゆくための検討を続ける。教育効果をより一層高めることができるよう教育内容・方法の充実をはかっていく。

〈8〉国際社会システム研究科

修士学位取得プロセスのさらなる透明化並びに、年満退職予定教員の補充を含めた教員組織の充実化に取り組んでいる。

〈9〉薬学研究科

A、B、Cの3分野それぞれの志願者・修了者の数及び卒業生へのアンケートなどのデータを集め、ニーズにマッチした有効な制度であることを検証する。

〈10〉生活科学研究科

生活科学研究科では、両専攻のニーズに合った教育内容について、今後も検討していく。

②改善すべき事項

〈1〉大学全体

【ナンバリング】

2014 年度中にナンバリングを完了することを目指し、2013 年度から検討に入る。科目の順次性表示のみを目的とするのではなく、本学が設置する科目が、分野ごとに過度に重複していないか、不足する分野はないか、同一分野の体系性に問題はないかなど、科目の総点検をも目的としてナンバリング方法を検討する。

【共通英語教育の改善】

グローバル人材育成のための教育の改善を目指して、グローバル人材育成ワーキンググループが2012年度の秋に設置された。約半年間の議論を経て2012年度末に中間答申

(4(2)-19) がまとめられ、引き続き検討されているところである。

その中間答申では、本学としてのグローバル人材のイメージを、主体性を持ちオープンマインドでグローバルな規模でのチャレンジ精神と持つとともにコミュニケーション能力に優れた人物像としてまとめ、そのような人物をどのような方法で育成するかについて検討がなされた。その一環としての共通英語教育の改善についても、英語スキルの向上を目指すだけでなく、グローバル人材育成の観点から実施する必要があると指摘されている。

共通英語教育に関しては、今年度から5点にわたる改善が始まったが、これをさらに継続的に実施し、点検し、改善を図り、英語教育内容のさらなる向上を図るためには、教育

内容、教育方法、評価方法、講師に対する研修その他の改善を早急に強力に推進する必要がある。具体的には、教育方法についてはグローバル人材育成のために、ディスカッション等のActive Learning の手法を取り入れた英語教育方法の抜本的改革も必要となる。また、教育成果の測定方法としてはTOEICを測定基準の1つとすることを検討している。

【英語で実施する科目の増設】

グローバル人材育成の観点から見て、グローバル人材として必須の教養に関する科目が不足している分野がある。それらは、世界の主要な宗教に関する基本的な理解を得る科目、世界の近現代史に関する基本的な理解を得る科目、世界における日本文化の受容に関する科目、国際協力に関する科目などである。今後、このような科目をできれば英語で実施するとともに学生にこのような科目の履修を促すしくみを考える必要がある。そのためには、『グローバル人材育成ワーキンググループ中間答申』に記載されているとおり、英語教育センター（仮称）のような組織を立ち上げて強力に推進する必要があると思われる。英語コンテンツ科目増設に関する数値目標としては、同『中間答申』にも記載されているとおり、今後5年間で現在の80科目を100科目にすることが目標である。

さらには、このような英語コンテンツ科目を履修することにより、卒業単位の半数程度を英語で学ぶプログラム（『グローバル人材育成ワーキンググループ中間答申』ではGlobal Liberal Arts Program（仮称））を設けて留学希望者や留学からの帰国者の要望に答えつつグローバル人材の育成に努める。

〈2〉学芸学部

国際教養学科では、2014年度から、英語コンテンツ科目を増やして英語スキル科目も充実させた。このカリキュラム改正は、在学生にも適用される。可能な限り幅広い分野がカバーされるよう努めたが、その効果については今後の動向を見守る必要がある。

〈3〉現代社会学部

現代社会学部では、社会システム学科と現代こども学科のカリキュラム・ポリシーとしての教育課程編成・実施の方針が個別に設定されているため、学科ごとに分けてそれぞれ提示する。

社会システム学科には、「国際理解コース」、「京都学・観光学コース」、「ライフマネジメントコース」、「ビジネスマネジメントコース」、「法システムコース」の5コースが設けられているが、現在、それぞれのコースにおける学習のあり方の見直しをはじめている。具体的には、コース内での共通理解の構築、あるいは共同のフィールドワークや講演会などの実施など、所属学生の交流を促す機会となるとともに、それぞれのコースの特色を明示化するような試みが求められる。

現代こども学科では、学生が目的意識をもって「こども学」を意欲的に学習するために、カリキュラム・ポリシーをさらに詳細に説明し、「こども学」を基礎とする教員・保育士・社会人を育成するという学科の基本方針を明確に周知する必要がある。

学生の外国語運用能力を強化し、海外での学習機会を維持継続・拡充し、グローバル人材の育成に努めていきたい。

〈4〉薬学部

5年次生の実務実習期間中の学力低下は、全国の薬科大学共通の問題である。実務実習に集中すると結果的に薬剤師に必須の知識が低下するということは本末転倒であるが、現実である。実務実習内容に関しては本学だけで解決できる問題ではないが、低学年時からの一貫したオリエンテーションを導入し、6年間の学びの中での実務実習を位置づけることによって、学生の勉学意欲を維持・高揚させるプログラムや、各学期末に国家試験必須問題を意識した実力テストの実施などを計画した。

〈5〉表象文化学部

英語英文学科では、2014年度入学生からカリキュラム改正を行う。1年次よりスキル科目 (reading、speaking、listening、writing) をレベル別クラス編成とし、4技能をバランス良く向上させる。

日本語日本文学科では、古典分野の科目の整理・統合を進めていく予定である。

〈6〉生活科学部

人間生活学科では、学生が目的意識と学習意欲を持って学習を発展させていけるよう具体的な方策を講ずる。

〈7〉文学研究科

情報文化専攻では、これまで卒業論文の指導の段階で進学を奨励していた。これでは、キャリア指導の点で出遅れるため新入生の段階から修士課程の周知をするとともに修士論文発表会への参加を呼びかけるなど対策を講じることで効果を挙げてきている。

〈10〉生活科学研究科

食物栄養科学専攻では、特に食物栄養科学コースにおけるキャリア教育について考える必要がある。

4. 根拠資料

- 4(2)-1 大学コンソーシアム京都単位互換履修生募集ガイド2013
- 4(2)-2 2013年度同志社大学単位互換科目履修ガイド
- 4(2)-3 金城学院大学単位互換科目履修ガイド
- 4(2)-4 放送大学単位互換科目履修ガイド
- 4(2)-5 2014年度金城学院大学/日本女子大学/フェリス女学院大学への交流学生募集要項
- 4(2)-6 学芸学部 (音楽・情報・国際・音楽専攻科) 履修要項・シラバス (既出: 1-8)
- 4(2)-7 同志社女子大学ホームページ
「学部学科・大学院: 学芸学部: 情報メディア学科・カリキュラム」
(http://www.dwc.doshisha.ac.jp/faculty_dep_info/liberalarts/media/curriculum/curriculum.html)
- 4(2)-8 現代社会学部履修要項・シラバス (既出: 1-9)

- 4(2)-9 薬学部履修要項・シラバス (既出：1-10)
- 4(2)-10 表象文化学部履修要項・シラバス (既出：1-11)
- 4(2)-11 生活科学部履修要項・シラバス (既出：1-12)
- 4(2)-12 大学院履修要項・時間割表・シラバス (既出：1-13)
- 4(2)-13 大学院薬学研究科 (博士課程) カリキュラム、大学院科目の相互関係と出口イメージ
- 4(2)-14 2013年度 教務関係基礎統計資料、2013年度 免許・資格関係基礎統計資料
- 4(2)-15 2013年度春学期授業アンケート実施結果報告書
- 4(2)-16 2012年 同志社女子大学 在学生アンケート (既出：2-18)
- 4(2)-17 2012年同志社女子大学在学生アンケート報告書 自由記述 食物栄養科学科
- 4(2)-18 英語コンテンツ科目一覧
- 4(2)-19 グローバル人材育成の方策について (中間答申)
- 4(2)-20 開講科目表・時間割表